

佳生流

西 村 雲 華

新潮花

細いエニシダの線は一本一本人念にそろえることです。直枝を左右から抱くように用い、虚空間造型を創るのがこの抱合様式です。



エニシダ、オンシジューム
シンピジューム、コンシンネ

新潮花

住生流の代表的な流花です。
直枝と曲枝で形を整え、様々
まな造形美を創り出す基本花
型です。



ネコヤナギ、グラジオラス、スカシユリ



ワカマツ、ロウバイ、ストレリッチア
シロツバキ

目次

代表流花—グラフィア—
はじめに 家元 西村雲華

日本のいけばなと佳生流

いけばなの変遷	1
佳生流と新潮格花	2
佳生流の創始	2
佳生流への改称	3
日本民族への自覚	3
佳生流のいけばな分類	4

いけばなの基礎と知識

素材(花材)の見方、考え方	6
植物の個性を知る	6
花とともに生きること	6
古典格花と新潮格花	8
自然美と造形美について	9
自然主義	9
非自然主義	9
無限の創造美	10
くらしの芸術いけばな	11
線の美しさを使いわけ	12
盛花の使い方	12

古典格花の使い方	12
新潮格花の使い方	12
面の美しさを使いわけ	14
盛花の使い方	14
新潮花の使い方	14
ハランの使いわけ	17

共通の心得

共通の用具について	20
剣山	20
花鉄と付属用具	20
水揚ポンプ	20
斧	20
共通のテクニクについて	21
花鉄の使い方	21
切り方	21
花材の曲げ方	22
常識としての水揚げ	23
水切り	23
水折り	23
その他の水揚げ法	23
剣山の使い方・花材の留め方	24
直接剣山に突き挿しては	24
いけなもの	24
直接剣山に突き挿して留めるもの	25
右勝手と左勝手について	26

佳生流の流花入門… 新潮花

佳生流の流花	28
新潮花とは	29
新潮花の種類	29
新潮花の基本といけ方	31
新潮花の構造	32
役枝の名称	32
新潮花の様式	33
抱合様式	33
対照様式	34
複合様式	34
新潮花の花器	35
新潮花の役枝の寸法	35
抱合様式の基本	35
曲枝の作り方	36
抱合様式の姿態	37
抱合様式の作例	38
グラジオラスとエニシダの複合美	38
眺めのできない花材の使い方例	40
面を直枝に用いて	42
対照様式の基本	43
対照様式の作例	44
必要な対照枝を抽出する	44
対照枝と虚空間の美	45
きぶしの枝分解と使い方	46

空間は対照美の助け役	47
株分けによる空間の深さ	48
複合様式の基本	49
複合様式の作例	50
木苺の曲枝で動感を強調	50
手工をこらさない複合美	51
明るい意匠美をあらわす	52
横枝の造形感覚を生かす	53
新潮花の作例のいろいろ	54
和装美人	54
気高い香り	55
微妙な美の表現	56
色彩の対照美	56
無から有を生む	57
隠し味を大切に	58
葉の片面を使うこと	59
線のかたまり	60
フトイの直線をいける	62
新潮花作例	63
個性美を生かす	69
応用は適正に	69
新潮構成花のいけ方	70
新潮構成花の基礎知識	70
点・線・面・塊り	70
コントラストとハーモニー	71
構成上の空間	73
役枝の名称と基本花型	74
構成花の花器	74

構成花創造への道しるべ	75
求心構成と遠心構成	75
抱合様式のアレンジ	76
対照様式のアレンジ	78
裏を上部に	79
平凡な器は変化を	80
構成花作例	81
オブジェ作品	86
花展作品への指向	88
新興花の基本といけ方	
新生花のいけ方	90
新生花の基本	90
新生花の花器	90
新生花の役枝の名称	90
新生花の花型	90
新生花のいける順序	92
作例解説	92
立真型の作例	93
後真型の作例	94
前真型の作例	96
新生花の作例	97
雅風花のいけ方	99
雅風花の作例	101
置花のいけ方	102
置花の用具	102

置花の花型	102
飾り場所	102
置花の作例	103
一般自由花 盛花と投入花	
自由花をいける心がまえ	106
盛花、投入花の名称	106
花材の取り合わせについて	107
盛花の表現と構成	108
盛花の表現	108
盛花の構成	108
盛花の姿態(花型)	109
役枝の寸法の割り出し方	111
花型の役枝の方向	111
立真型	111
傾真型	113
垂真型	113
平真型	113
四方正面型	113
花材と花型の関係	113
盛花に使用する花器	114
花器と剣山の位置	115
表現のテクニク	116
葉組みをする	116
葉をとる	116
草花物を高く	116
花材の取り合わせ	117

花材によって器を……………	117
立真型基本のいけ方……………	118
リアトリスの出生をいかして……………	118
傾真型基本のいけ方……………	119
木苺の枝振りの発見……………	119
平真型基本のいけ方……………	121
見おろす花・花器とコントラストを……………	121
垂真型基本のいけ方……………	122
見上げる花・視線の位置を考慮……………	122
四方正面型基本のいけ方……………	123
風情のある四方花を……………	123
投入花の基本といけ方……………	125
投入花の表現と構成……………	125
投入花の意義……………	125
投入花の姿態……………	126
役枝の名称と寸法……………	126
花型と役枝の方向……………	126
立真型……………	126
傾真型……………	127
平真型……………	127
垂真型……………	128
投入花の花器……………	128
投入花の挿し口……………	128
投入花の留め方……………	129
横一文字留め……………	129
縦一文字留め……………	130
折り留め……………	130

その他の留め……………	130
投入花をいける心がまえ……………	131
立真型基本のいけ方……………	132
リアトリスは伸びのびといける……………	132
傾真型基本のいけ方……………	133
胴の丸い器を使って……………	133
平真型基本のいけ方……………	135
横枝の特性を生かして……………	135
垂真型基本のいけ方……………	136
垂れ物の風情をいけず……………	136
盛花にも雅風花……………	137
一枝一枝を強調して……………	137
柔らかさの表現……………	139
手付の電には……………	140
ガラスの器には……………	140
西村雲華の足跡……………	141

はじめに



佳生流華道家元

二世 西村雲華

日本には、いけばなというすばらしい伝承芸術の遺産があります。花の心を知る人間の豊かな気持ち自然と結びつき、美しいいけばな芸術が生まれ、日常生活の中で多彩に生かされていることは、まことにすばらしいことです。

しかしながら、あまりに生活化されたために本来の精神的な内容に欠け、いけばな芸術の本質が失なわれつつあることは、私ども華道家として反省しなければならぬことであると思います。

古典と現代とを問はず、いけばなとはなんであるかをもう一度、ふりかえって見なければなりません。変わったものをいけば、それが新しいいけばなであると簡単にかたづけられない深いものを感じます。それは伝承芸術をより高い次元のものに築き上げるのが、現代に生きる私どもの責任であり仕事であると思うからです。古典の本質的なものをじゆうぶんに把握してこそ、現代に生きる姿に置きかえられるといえましょう。そこにこそ、人間の精神の、ほんとうに打ち込まれたこれからのいけばなが割り出されるのです。

古典から現代まで、さまざまな角度からいけばなを楽しんでいただけるのが本流のあり方で、とくに新潮花という特色ある格花を制定し、これを研修することによって、いけばな造形に対する新しい分野を会得していただくことができるようになっていきます。

流派をこえた立場で現代のいけばなを自由に楽しんでいただけるのが佳生流のあり方であり、本書の意義も実にもそこにあると信じております。

文化とは如何なる時代にも、如何なるハイテクにも侵されないその国に育った伝統文化を意味するのであって、いけばなはその代表的な尊い芸術といえるでしょう。誇りある日本文化をしっかりと身につけていただき、心豊かな人生への糧となればこれに優るものはありません。

日本のいけばなと佳生流

いけばなの変遷

花を愛し、自然にあこがれる心は人間の本能ともいふべき共通の美しい発露です。とくに日本民族は自然の美しい環境にめぐまれ、自然を愛する感情は、世界のどの民族よりもひとしお深いものがあるといえます。

清浄無垢な花を供えて神仏の御心をなぐさめ、みずからもやすらぐという暖かい気持ちで、花を挿すという形式を生み出していったのでしよう。

室町時代にはいり、そのような献供花も部屋飾りを兼ねるようになり、中期頃には花の美しさよりも、挿すことに重点がおかれるようになり、自然そのままの美しさより、人工を加えた形の美が賞美されるようになったので

す。これが華道として確立された第一歩なのです。今から五百年ほど前のことで、ここに立花(古立華)と称する優れた芸術いけばなの完成を見たのです。桃山時代から江戸時代初期にかけては、主として大伽藍、書院建築にふさわしい大作で豪華なものが僧侶や貴族たちの手によってつくられました。これが立華という様式で、その内容には、自然を基調としたすぐれた作風のものが見られたのです。

江戸時代も進むにしたがって、庶民の間に花に対する関心が深まり、さらに形態の美しさが求められました。そして立華は流行から定型化への道を次第に急ぐことになったのです。このように一般庶民も、立華の形式美に心をひかれましたが、壮大で複雑なため、

立華はかならずしも庶民的な様式とはいえませんでした。生活環境に持ち込むことのできる簡素な形式のいけばなの生まれる素地が次第にできていきます。このようにして、三才形式の古典格花、すなわち生花が始まるのです。

明治にはいり、長い鎖国でもっとも遅れをとった自然科学が急速に学びとられ、自然をありのままの姿に見ようとすると動きとともに、これまでの立華や生花美からはなれて、自由な表現を樂しむ傾向が生まれたのです。洋花が輸入されるようになると、いっそうこれまでの形式的なものはそぐわなくなり、ついに新しい様式のいけばなである盛花と投入花、すなわち自由花が生ずるにいたったのです。昭和の初期までは、この自由花が全盛をきわめ、

たくさんの流派が乱立したのですが、第二次世界大戦後は西欧美術の影響で純粋造形としての芸術的意識がいけばな界全体に燃えさかることになりました。これまでの自然主義的な物の見方から、人間中心の造形芸術としてのいけばなが大きく台頭してきたのです。

佳生流と新潮格花

いけばな界において、もっとも要求されることは、生活に密着した一般庶民芸術としての正常ないけばなの確立にあると思います。先祖が築き上げた華道の「原点」に立って、それがなんであるかを知らなければなりません。花を愛し、花を挿し、美しい花を見て、自分で慰めているだけではいけばなする必要は何もないわけです。珍しい花を集めて一般人の目を楽しませるだけの花展では園芸店の出店としての価値しかないわけです。いけばなは、自然をアレンジして、さらに深く美しく何等かの形で人間感情を表現しようとするものでなければなりません。おそらく先祖の立派な作家たちもそれとあまり違わない精神を花に宿したものとと思われるのです。

現代に生きるわたくしたちは、その精神を汲みとり、新しい時代の伝承芸術として、立派に後世に残すべきいけばなの確立を果たさなければならぬのです。佳生流華道においては、昭和二十四年に新潮格花を制定し、格花としての格調高い新しい花型を確立いたしました。

一花、一葉、一枝、一空間に至るまで、禅の道に通じ、虚の心をもって、美の要素を探求するもので、これは美を創造する力を養い、高い美的教養を身につけることのできるいけばなをめざしたものです。従来の自由花の盛花や投入花とは本質的に違ういけばなであり、自然と人間の心がひとつになって生活に密着する高い次元のいけばなののです。

佳生流の創始

佳生流は、西村翠雲に始まります。つまり私の父です。父は大坂眞盛流家元、上田正道先生に師事しました。当時の住まいである兵庫県の中央部にある片田舎、人力車や馬車が何よりの交通機関というところへ、大阪から先生を招いて、いけばなを習ったのが初め

です。その後、上田先生が死去し、音信も不通となったことから、昭和二年に華道家元昌鳳院流を創始したのです。初代家元は、絵や写真を好み、当時の田舎には珍しい存在で、華道を始めてからは、持ち前の器用さを發揮して、竹や木で花器や花台の類をたくさんつくり、彫刻の類も素人とは思えない精巧なものを制作しています。華道もとくに生花の奥義をきわめ、さまざまに花の姿を花図に残しております。また一方では、抹茶は截内流を、母(西村松露)とともに指導し、自然の風趣に茶華三昧の境地を楽しんだのです。

そうした環境に育った私は、幼少の頃から華道に親しんだので、自然のうちには技術がそなわり、終戦後いち早く神戸に教室を開きました。これからの新しい日本のいけばなは、伝統ある芸術として流派を超えた姿で伝えなければならぬという見地から、新日本華道会と改名しました。そして前述のように、超流派的な指導の上に新日本華道会としての特異な花型である新潮格花を昭和二十四年に制定したのです。昭和三十一年八月、父の初代家元翠雲が急逝し、その後を継いで今日にいたっています。

初代家元が流を創始してから、かなりの年月を経ておりますが、その大半が田舎での趣味と風流の生活に終始したため、昌胤院流時代の流勢はきわめて弱く、新日本華道会と改名してから、つぎつぎと新しい作風が開発され、飛躍的な発展をとげたのです。

以上のようなことから、新日本華道会に寄せられるいけばな界の期待は、非常に大きく、新開発の新潮格花をさらに押し進めることが、いけばな界に清流をそそぐことになったのであります。

佳生流への改称

超流派的な活動を展開してきたとはいえ、その間に、新潮花・新生花・園芸花・雅風花・置花など、流独特の花

種を制定した以上、これらの花種を親しみのあるいけばなとして生活に密着させるためには、流を強調することがこの道の常道であることを思い、昭和五十八年に佳生流と改名いたしました。その意味は、人のために土盛をして生きる流——ということ、人のために役立つ佳生流として成長魚の如く改名したわけです。

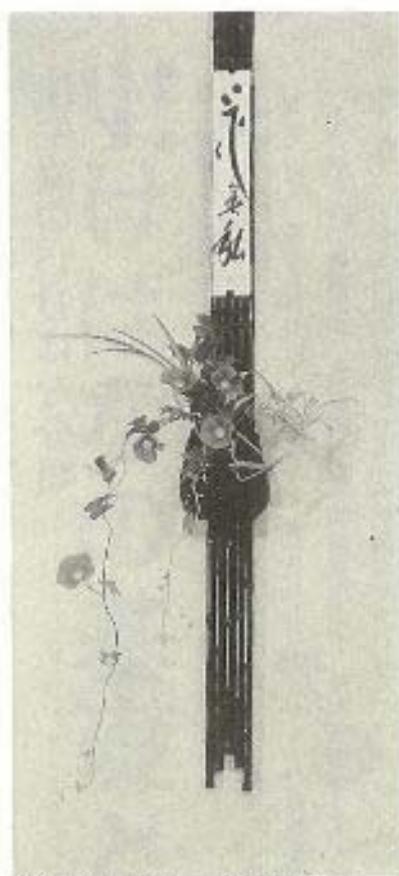
日本民族への自覚

現代の日本にもっとも要求されているもの、それは精神文化の昂揚にあると思われまふ。日本民族でありながら日本を忘れつつある若い世代の人たちに、何とか美しい日本の伝統精神や文化の糧を植えつづけることができたらと思います。美しい日本、それは偉大な

古典芸術の精神でもあります。そして、その美を創り出すものは自然を媒介とした情操的な精神といえます。日本の伝統芸術を通じて、世界に日本民族のすばらしさを立証させた例として、ノール文学賞の川端康成先生の快挙があります。伝統芸術の各分野でそれにつづく意気を示されなければならぬと思います。

産業経済の発達はめざましいものがあり、生活文化の面でも機械化文明の発達によって、すばらしいものが見られるようになりましたが、立ち遅れているものは精神文化といえましょう。

私たちは、美しい日本の姿がどこにあったかを、もう一度ふりかえって、日本民族であることの自覚をもたなければならぬと思います。それには、政治家、学校の先生、そして生徒、親その子供、すべての人たちがそれぞれの立場に立っての自覚がなされなければなりません。そのことが自然を理解する原理であり、人としての美しい姿なのです。この精神が日本にのみ発達した華道の精神に通じ、花の心を表現する根源となっていることを忘れてはならないと思います。



掛花 = アサガオ・オリヅルラン
短冊 = 花無私……家元書

著者

西村雲華の足跡

昭和五年 昌胤院流初代家元 西村琴雲師

に師事

昭和二十二年 流派を超えての活動を展開
するための新日本華道と改称

” 兵庫県立第一神戸高等女学
校（現在県立神戸高等学校）華道講師現
在に至る。

昭和二十五年 第一回日本花道展入選

文部大臣奨励賞獲得

昭和二十六年 兵庫華道公募審
査委員

査選運営委員長

昭和二十八年 新潮格花制定（流花）

昭和三十一年 神戸市立太田中学・丸山中
学・舞合中学・高井台中学・御影中学・
住吉中学・各中学校講師兼任

昭和三十二年 私立神戸森学園講師兼任

昭和三十二年 全日本いけばな作家百人展
運営委員

昭和三十四年 皇太子御成婚記念・全日本
いけばな作家五〇人展出品

昭和三十七年 サンケイ新聞社主催「世界
いけばなフェア」国際いけばな展」出品

（大阪松坂屋）

昭和三十七年 いけばな作家集団（創華会）
結成主宰

昭和三十八年 日本いけばな研美社同人

昭和四十年 世界いけばな選運委員長

昭和四十一年 民芸花制定（流花）

” 財団法人日本いけばな芸術

協会常任理事

” いけばな日本展出品

昭和四十二年 日本いけばな芸術協会発会
記念展（東京高島屋）

天皇・皇后の行幸啓を仰ぐ

昭和四十五年 万国博覧會、日本いけばな
芸術展出品（大阪高島屋）

昭和四十七年 中国文化芸術を訪ねて台北
研修旅行団長（日いけばな研美会）

昭和四十八年 神戸市、天津市友好親善文
化使節として訪中

昭和四十九年 神戸市布引山・徳光禅院に
花の碑「花の心を」建立

” 神戸市・ソ連リガ市姉妹都
市提携文化親善使節として花展並デモン
ストレーションを行なう。

” エリザベス女王来日、東京
赤坂迎賓館和風別館にていけばな展開催
に際して供す。

昭和五十一年 新生花・園芸花制定（流花）

” 日本いけばな芸術協会創立
一〇周年記念展出品（東京高島屋）皇后・
皇太子・皇太子妃ご来臨

昭和五十四年 兵庫県いけばな協会会長歴
任

” 兵庫県文化協会理事並びに
兵庫県フラワーセンター協合理事兼任

” 兵庫県・ハバロフスク友好
都市提携文化親善使節として訪ソ、花展
並にデモンストレーション

昭和五十五年 兵庫倶楽部理事兼任

昭和五十六年 NHK婦人百科「枯れた花

材を用いて」放映

” モナコ公園グレース王妃を
日本いけばな芸術協会西部役員による花
展にご案内（モナコ神戸店）

” パリ、いけばな親善使節団
長として訪仏、花展並びにデモンストレ
ーションを行なう。

昭和五十七年 露華個人展（書・絵・写真・
花）兵庫県民会館特別展示室

” 兵庫県・広州友好親善使節
として訪中

” 雅風花・置花制定（流花）

” 近畿華道協会連絡協議会設
立・初代議長、「六月六日」をいけばなの
日として制定

昭和五十八年 新日本華道を住生流に改名
財団法人日本いけばな芸術
協会副理事長

昭和六十一年 「66ヨーロッパ花の文化親善
使節としてモナコ公国訪問いけばなデモ
ンストレーションを行なう。モンテカル
ドテレビ局から日本のいけばな放映、モ
ナコ国際花のフェスティバルコンクール
に参加。日本を代表して審査員に。

” イケバナインターナシヨナ
ル世界大会に出品（国立京都国際会館）

昭和六十二年 昭和六十二年 佳生流創始
六〇周年記念式典並花展

昭和六十三年 第三回国民文化祭総合フェ
ア「展実行委員、同ふれあい日本のいけ
ばな選運委員長

昭和六十四年 兵庫県文化使節としてワシ

ントン州へ、花展開催

昭和六十四年 雲華個展(書・絵・写真・花)

兵庫県民会館特別展示場

平成元年 (財)日本いけばな芸術協会代表

参与

兵庫県いけばな協会名誉相談役

平成二年 国際花と緑の博覧会出品

その他の花展・流展

昭和二十七日二十九日 神戸三越百貨店

(流展三回)

昭和三十一年四月十日 神戸大丸百貨店(流

展三回)

昭和四十一年四月十五日 神戸そごう百貨店

(流展一回雲華個人展一回)

昭和四十六年平成二年 神戸さんちかホー

ル(流展十四回、雲華・公延二人展一回)

昭和二十九年平成二年 兵庫県招待出版

四五回、兵庫県協会展参加四五回

昭和四十七年 個人展(絵と書と写真)と

いけばな展(KCCギャラリー)

昭和五十年 古典花百景色紙展(ギャラリー

いさんちか)

昭和五十四年六月二十二年 写真展(あいグル

ープ三人展五回、兵庫倶楽部七回)

昭和四十一年平成三年 日本いけばな芸

術展並各地方展出品六八回

著書

昭和二十八年 新日本華道選抜作品集I

B5 一九五頁

昭和四十五年 新日本華道のいけばな B

5 二二〇頁

昭和四十六年 新日本華道テキスト総括編

(ノート併用)

昭和五十二年 新日本華道選抜作品集II

B5 一八五頁

昭和五十六年 佳生流テキスト総括編(ノ

ート併用) 一二〇頁

昭和六十二年 佳生流華道選抜作品集III

B5 二〇〇頁(カラー)

平成二年 佳生流のいけばな(教本) B5

一五〇頁

受賞

昭和五十一年 高松宮妃殿下より表彰

昭和五十一年 神戸市文化団体半どんの会

文化賞

昭和五十三年 日赤金色有功賞

昭和五十四年 兵庫県文化賞

昭和五十五年 神戸市文化賞

昭和五十七年 財団法人いけばな芸術協会よ

り特別功労賞

昭和五十七年 高松宮妃殿下より表彰

昭和六十二年 高松宮妃殿下より特別功労

賞と御下賜品拝受

昭和六十二年 高松宮妃殿下よりいけばな

褒賞杯拝受

平成元年 神戸新聞平和賞

昭和62年11月29日

佳生流創始六十周年記念初演奏

＝花ありて＝

山本敏男 作詩
高平麓山 作曲

一、傷つくと知りつつ

白い野茨いばらの

花を手折りし春の日は

いまも心に残る棘とげ

ああ花ありて 花ありてこそ

人の世は愛しきものよ

二、ひとたびの巡めぐりあ合あう

身の縁えんゆえ

赤いカンナはゆらゆらと

陽炎かげろうもえて夏は逝く

ああ花ありて 花ありてこそ

恋するは苦しきものか

三、風雪に打たれても

何を夢見る

咲く彩いろかなし寒椿

美しきこと耐えること

ああ花ありて 花ありてこそ

行く道は険しきものを

佳 生 流

著者 西 村 雲 華

発行 佳生流華道家元

神戸市中央区野崎通三丁目三十一番一
TEL (〇七八) 二二二-一六二三九
FAX (〇七八) 二二二-一六二六六